

ビッグ・ディール後の ILL

—千葉大学附属図書館亥鼻分館における調査—

米田奈穂, 武内八重子, 加藤晃一, 竹内比呂也, 土屋俊

抄録: 近年国立大学図書館全体としては文献複写依頼件数の減少が見られるが、千葉大学附属図書館亥鼻分館では文献複写依頼件数が減少していない。このような相違の生じる要因を明らかにするために亥鼻分館における 2002 年度から 2004 年度の ILL 文献複写依頼データを詳細に分析したところ、看護文献の依頼増加という傾向が明らかになった。亥鼻分館における受付タイトル分析及び NACSIS-ILL での全国的な依頼タイトル分析でも同様の傾向が見られたことから、その要因について看護分野の文献需要と提供という観点から考察した。

キーワード: ILL, 文献複写, 看護文献, ビッグ・ディール(Big Deal), 千葉大学附属図書館亥鼻分館

1. はじめに—本調査の背景と目的

1990 年代のわが国の大学図書館における重要な課題の一つは、いわゆる「シリアルズ・クライシス (Serials Crisis)」問題であったと言えるだろう。雑誌 (特に「外国雑誌」) の価格高騰に対応するために大学図書館は支出を増やしていたにもかかわらず、それを上回る価格上昇により、結果として国内で利用できる外国雑誌の純タイトル数が減少するという事態に立ち至っていた。1970 年代以来、わが国の大学図書館は、図書館間の相互協力によって資源共有を図り、利用頻度がそれほど多くない雑誌についても国内に整備することを政策的に押し進めてきた経緯があり、シリアルズ・クライシスはこのような政策を根幹から脅かすものであった。

シリアルズ・クライシスに対しては、いくつかの対応がなされたが、その一つが「ビッグ・ディール (Big Deal)」と呼ばれる包括的な雑誌購読契約 (出版社が刊行する電子ジャーナルの全タイトルをパッケージで提供するというもの) である。これを技術的に可能にしたのは学術雑誌の電子化であるが、政策的には、2002 年度に文部科学省から電子ジャーナル導入経費がライフサイエンスに関連する学部を持つ国立大学を中心に配分されたことの影響が大きく、これを契機に、すでに IDEAL(Academic Press) のコンソーシアムを立ち上げていた国立大学図書館協議会 (当時) が Elsevier などの主要な海外出版社を対象とした「国立大学図書館協議会電子ジャーナル・コンソーシアム」を成立させたことが一つの転換点となった。2004 年度には、17 の出版者を対象としたコンソーシアムが成立し、1 大学あたり平均 4,300 タイトルの電子ジャーナルが利用可能となった¹⁾。

このように国立大学における学術雑誌の利用可能性が高くなったことが、図書館相互貸借 (ILL) の件数にも影響を与えてきたと思われる。加藤は、2002 年度の国立大学図書館の NACSIS-ILL における文献複写依頼件数が 2001 年度に比べ約 10% 減少したことに対して、コンソーシアムによる電子ジャーナルの導入が ILL の依頼件数の減少に影響を与えたと述べている²⁾。ILL における文献複写依頼件数の推移についてより詳細にデータの推移を見ると、国立大学からの NACSIS-ILL 経由の文献複写依頼件数は 1999 年度の 637,517 件をピークに以後単調減少しており、2003 年度は 502,175 件で³⁾、20% 強の減少となっている。

しかしながら、これは国立大学全体を見たときのいわばマクロな動きであって、個々の図書館がすべて同じような状況を示しているとは限らない。例えば、ある国立大学の医学系図書館では、1999 年度の NACSIS-ILL 経由の文献複写依頼件数は 7,469 件であったが 2003 年度には 3,406 件にまで減少しており、これは減少率という点からみれば上記の国立大学全体の数値をはるかに上回っている⁴⁾。

一方、図書館の現場—千葉大学附属図書館亥鼻分館 (以下「亥鼻分館」)—の ILL の複写依頼担当者として実際に業務を行う立場にあった著者は、利用者への文献の提供という点で電子ジャーナルの恩恵を十分に感じていたものの、文献複写依頼件数が減少していないことも認識していた。このような状況を踏まえビッグ・ディール後の ILL の動向を把握するには、マクロな動向の分析が必要であると同時に、各図書館レベルといったミクロなレベルでの実証的な研究が必要であるとの認識に至り、本稿で報告するような調査に着手した。本稿では、その結果を報告し、なぜ亥鼻分館においては国立大学全体で見ら

れるような依頼件数の減少が見られないのかを明らかにする。また、それを踏まえてビッグ・ディール後のわが国の大学図書館の一次資料の提供における問題点を明確にしたい。

2. 調査対象

2-1. 千葉大学及び千葉大学附属図書館亥鼻分館について

まず、調査対象となる千葉大学、千葉大学附属図書館、及び亥鼻分館について概況の説明をしておく。

千葉大学は、文、教育、法経、理、医、薬、看護、工、園芸の9学部、医学部附属病院、各センター等の研究機関及び文学研究科、教育学研究科、社会科学研究科、看護学研究科、社会文化科学研究科、医学研究院、薬学研究院、医学薬学府、専門法務研究科によって構成され、教職員約2,500名、学生数約13,000名を擁し、総合大学としての規模、内容とも国立大学としては上位にある。キャンパスは西千葉地区、亥鼻地区、松戸・柏の葉地区にあり、それぞれに図書館（本館、亥鼻分館、松戸分館）が設置されている。

亥鼻分館は、戦前の官立千葉医科大学を前身とした医学部及び医学部附属病院、看護学部、薬学部（一部）、真菌医学研究センターをサービス対象とした図書館で、ヘルスサイエンス系図書館として、これらに所属する学生・教職員（約3,000名）の学習・研究活動を支えている。蔵書数は、図書約237,000冊、雑誌（冊子体）は約4,800タイトルである。

2-2. 千葉大学における電子ジャーナルの導入状況

ILLデータの分析の前に、千葉大学における利用可能タイトル数の推移について確認しておく（図1）。

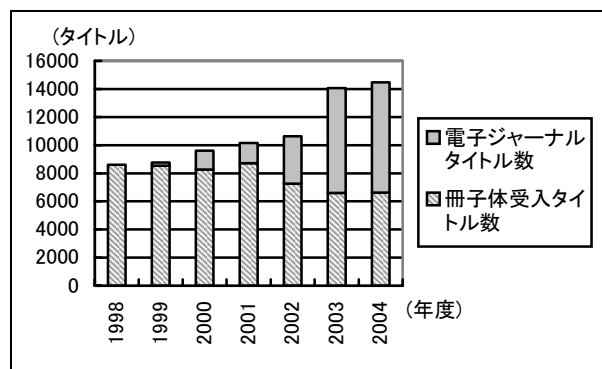


図1 利用可能タイトル数の推移

千葉大学では1999年度のScienceDirect(SD-21)導入を皮切りに、2000年度にはIDEAL、2002年度にはWileyInterScience、SpringerLink、

Synergyといった電子ジャーナル・パッケージを導入し、3,000タイトル以上のタイトルが利用可能となった。さらに2003年度にはKluwer Online、Nature Online、BioOne、そしてアグリゲータ系パッケージであるProQuest Medical LibraryやEBSCOhost ASE(Academic Search Elite)を次々と導入し、約7,000タイトルが利用可能となった。その結果、2003年度は2002年度の1.4倍近いタイトル増加となっており、電子ジャーナルだけ見た場合では倍以上の増加となっている。これらの数値が示すように、ビッグ・ディールによって利用可能タイトル数が増加するという状況は、千葉大学においても生じていた。

3. 亥鼻分館におけるILLの動向

以下の分析における2002年度から2004年度のデータは、千葉大学附属図書館業務システム内に蓄積されていた亥鼻分館におけるILL依頼/受付データである。また、10年前の傾向と比較するために提示した1994年度のデータは、NACSIS-ILLのログから抽出した。なお、今回の分析には千葉大学内の他キャンパス図書館とのILL(学内ILL)のデータは含まれていない。

3-1. 依頼

まず亥鼻分館における、ILL複写依頼件数推移の状況を確認する。前章において述べたように、1999年度以降、ビッグ・ディールによって利用可能タイトル数が増加している。電子ジャーナルのタイトル数が大幅に増加したのは2003年度であるが、この年度の学外への文献複写件数においては目立った減少は見られず、2002年の4,184件とあまり変わらない4,137件となっている（図2）。2004年度も4,212件で大きな変動は見られない。

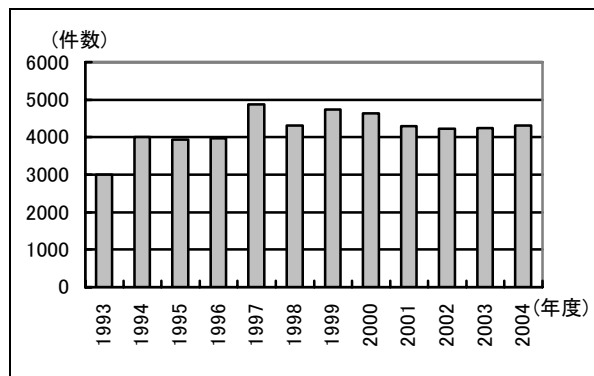


図2 学外への依頼件数の推移

この依頼データを申込者の所属という観点から分析してみると、医学部と附属病院からの依頼は2002

年度には2,217件であったが、2004年度には1,528件と約30%減少していた。一方、看護学部からの依頼件数は2002年度には1,771件であったが2004年度には2,529件と40%強の増加となっていた。すなわち亥鼻分館におけるILL複写依頼件数総数には変化が見られないが、依頼者の属性という点では大きな変化があることが明らかになった(図3)。

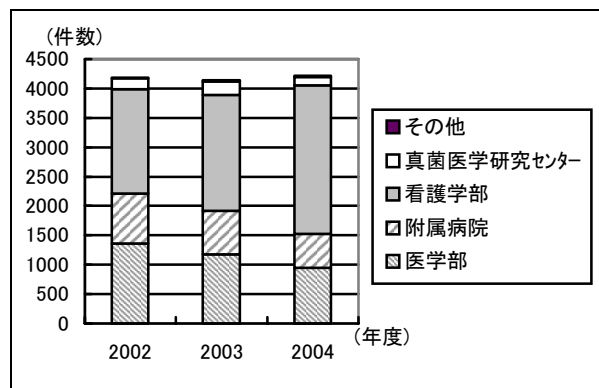


図3 複写申込者の所属別依頼件数の推移

次に、依頼の多いタイトルについての分析を行うために、年度ごとに依頼件数の多いものから降順のタイトル一覧を作成しこれらと比較した。この結果、2004年度には上位10タイトル全てを和雑誌が占めるようになり、また1誌を除き看護分野の雑誌となった。(表1)

複写依頼件数における和洋の比率の変化を調べたところ、和雑誌掲載論文への依頼が占める比率は2002年度が45%、2003年度が44%、2004年度が

53%と推移していた(図4)。比較のために調査した1994年度のデータによれば、2,952件の依頼のうち和雑誌掲載論文の割合は12%にすぎなかったものであり、基本的には和雑誌の占める割合が増加傾向にあることが明らかになった。またタイトルに“看護”、“ナース”、“Nurs” (“Nurse”あるいは“Nursing”を想定) という語を含むものを便宜的に「看護雑誌」とし、これらに掲載された論文への依頼件数を数え、依頼全体に占める看護論文の比率を算出したところ、全体としては2002年度が15%、2003年度が16%、2004年度が21%と推移しており、増加傾向が見られた。しかし洋雑誌掲載論文に限定してみると、2002年度が6%、2003年度が7%、2004年度が4%と推移しており、1994年度が9%であったことを考慮すると基本的には減少傾向にあるといえる。

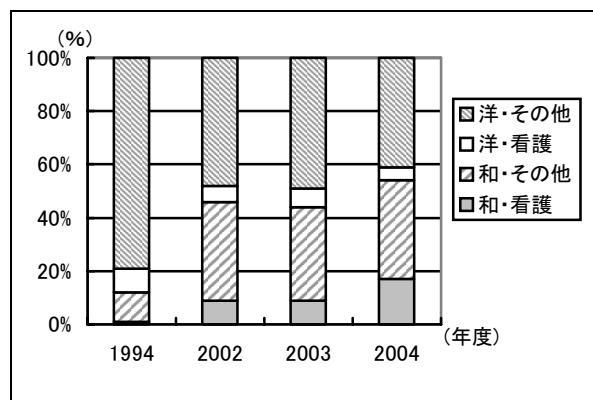


図4 依頼件数から見た傾向

表1 依頼件数 上位10タイトル

	1994年度	2002年度	2003年度	2004年度
1	Genomics	死の臨床	Journal of nursing staff development	月刊ナースマネジャー
2	Social science & medicine	整形外科と災害外科	日本看護科学学会学術集会講演集	整形外科看護
3	Canadian nurse	保健婦雑誌	日本助産学会誌	日本看護学教育学会誌
4	日本小児外科学会雑誌	日本重症心身障害学会誌	外来看護新時代	Heart nursing : ハートナーシング
5	Glia	医療. 増刊号	死の臨床	慢性疼痛
6	Nature genetics	日本リハビリテーション看護学会集録	Journal of rheumatology.	死の臨床
7	日本ストーマリハビリテーション学会誌	Dissertation abstracts international. A	臨床老年看護	日本精神科看護学会誌
8	Cytogenetics and cell genetics	Urological nursing = ウロ・ナーシング	医療. 増刊号	日本看護科学学会学術集会講演集
9	Journal of clinical pathology / Image / Health care for women international	Nurse education today	早期大腸癌	日本リハビリテーション看護学会集録
10		消化器内視鏡の進歩	Current biology	外来看護新時代

注1: 太字は看護分野の雑誌(和雑誌は医学中央雑誌の分類が「看護」のもの、洋雑誌はUlrich's periodicals directoryでSubjectが“nurses and nursing”のもの)を示す。

注2: 1994年度の順位では、9位となるものが3誌あるため、10位は空欄となっている。

雑誌のタイトル単位で分析をすると、文献複写依頼の対象となったタイトルの数は2002年度1,894、2003年度1,960、2004年度1,870で、そのうち「看護雑誌」の割合は和洋を合わせて2002年度、2003年度はいずれも10%、2004年度は12%となっておりあまり大きな変動はない。しかし比較的依頼が多く生じたタイトル（本稿では年間5回以上依頼が生じたタイトルとしており、2002年度：179タイトル、2003年度：158タイトル、2004年度：170タイトルである）に限定して分析をすると、「看護雑誌」の割合は2002年度21%、2003年度23%だったものが2004年度には31%になっている。これは図4に示す論文単位のカウンタよりも著しい増加であり、なおかつこの傾向は和雑誌においてより明確に現れている。また、論文単位のカウンタにおける比較同様、1994年度との違いは顕著である（図5）。

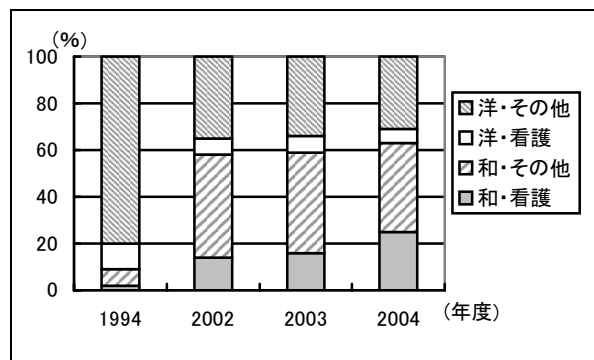


図5 依頼タイトルから見た傾向 (年間5回以上依頼のあったタイトル)

これらの分析から、亥鼻分館におけるILL文献複写依頼については、1) 医学部・病院という医学系からの依頼件数が大幅に減少した。これは前述の国立大学医学図書館など全国的な動向と同じ傾向を示しており、ビッグ・ディールの影響が顕著に現われている。2) 看護学部からの依頼が増加しており、この増加量は、医学系の文献複写依頼件数の減少を帳消しにするほどである。3) 洋の「看護雑誌」掲載論文に対する依頼については、絶対数が少ないために目立たないが、減少傾向にあり、看護分野でもビッグ・ディールの影響がない訳ではない。4) しかし看護分野では和雑誌に対する依頼件数が多いために、看護分野全体として見た場合には前述のビッグ・ディールの影響が見えなくなっている。5) 依頼件数によるランキングの結果及び5回以上依頼されている雑誌における「看護雑誌」の占める割合から、看護分野では特定の和雑誌への集中度が高い、といったことが明らかになった。

3-2. 受付

一方、亥鼻分館におけるILL文献複写受付状況にも依頼と同様の変化が起こっている。受付の多かったタイトルを見ると、2002年度から2004年度は看護分野の和雑誌が上位10タイトル中4タイトルを占めている。1994年度に看護分野の和雑誌の最上位が25位だったことと比較すると、受付の多いタイトルとして看護分野の和雑誌が上位に入っている。(表2) さらに受付全体を見ると、受付件数は2002年度6,584件、2003年度6,779件、2004年度6,004件となっているが、そのうち和雑誌掲載論文の割合は、2002年度の30%から2003年度には37%、2004年度36%と推移している。2004年度に1ポイント減少しているものの、1994年度の和雑誌掲載論文比率が15% (1994年度受付件数4,019件) だったことから考えると、依頼における状況と同様、受付においても和雑誌の占める割合が高まっているといえる。また、「看護雑誌」(その定義は、3-1に述べたものと同様である) 掲載論文に注目して分析を行うと、2002年度から2004年度の3年間では年間受付件数に占める和の「看護雑誌」掲載論文の割合は約13%、同じく洋の「看護雑誌」掲載論文は約7%で、3年間に大きな変化はない。しかし比較のために1994年度のデータを分析してみると、洋の「看護雑誌」掲載論文の割合は7%で、これは最近3年と変わらないのに対し、和の「看護雑誌」掲載論文の割合はわずか2%しかなく、受付においても、和の「看護雑誌」の占める割合が増えてきたことがわかる。このことは、亥鼻分館が特に看護分野においてILL複写依頼という形で学外の大学図書館に依存していながらも、同時に伝統ある看護学部をサービス対象とする図書館として、約300タイトルの看護系雑誌を所蔵し、わが国の看護文献の需要を満たす上でも一定の貢献をしていることを示している。

4. 全国的なILLの動向との比較

前章に示したように、亥鼻分館におけるILLでは看護分野の文献の依頼及び受付件数の増加が顕著であったが、このような現象が亥鼻分館特有のものであるのかどうかを確認するために、NACSIS-ILL全体におけるタイトル別依頼件数の確認を行った。この分析には国立情報学研究所から提供を受けたNACSIS-ILLのログデータを使用した。

2001年度から2003年度にかけて受付の多かった上位10タイトルの推移を示すのが表3であるが、2001年度には上位10タイトル全てが洋雑誌であったのに対して、2002年度には3タイトルが、2003

表2 受付件数 上位10タイトル

	1994年度	2002年度	2003年度	2004年度
1	Anticancer research.	千葉看護学会誌	千葉看護学会誌	千葉看護学会誌
2	Oncogene.	Anticancer research.	神奈川県立看護教育大学校看護教育科看護教育研究集録.	Anticancer research.
3	Leukemia & lymphoma.	神奈川県立看護教育大学校看護教育科看護教育研究集録	Anticancer research.	神奈川県立看護教育大学校看護教育科看護教育研究集録
4	Carcinogenesis.	Movement disorders	Movement disorders	緩和医療学
5	Synapse.	看護教育学研究	緩和医療学	看護教育学研究
6	Diabetic medicine	Journal of advanced nursing	日本看護管理学会誌	日本救急医学会関東地方会雑誌
7	Neuropsychopharmacology	千葉大学看護学部紀要	健康心理学研究	老年精神医学雑誌
8	Journal of hepatology	European journal of vascular and endovascular surgery	千葉大学看護学部紀要	Movement disorders
9	International journal of developmental neuroscience	The Diabetes educator	The Diabetes educator.	Journal of advanced nursing
10	Journal of gastroenterology and hepatology.	Research in nursing and health	Journal of endovascular therapy	千葉大学看護学部紀要
25	日本がん看護学会誌			

注：太字は看護分野の雑誌（定義は表1と同じ）を示す。

表3 NACSIS-ILLにおける依頼件数 上位10タイトル

	2001年度	2002年度	2003年度
1	Anticancer research.	Annals of the New York Academy of Sciences.	日本精神科看護学会誌
2	Biochimica et biophysica acta.	Anticancer research.	Annals of the New York Academy of Sciences.
3	Annals of the New York Academy of Sciences.	Biochimica et biophysica acta.	Anticancer research.
4	Neuroreport	日本精神科看護学会誌	母性衛生
5	Langmuir	Proceedings of SPIE	Biochimica et biophysica acta.
6	Journal of applied polymer science.	Neuroreport	日経アーキテクチュア
7	Electrophoresis.	神奈川県立看護教育大学校看護教育科看護教育研究集録	日本公衆衛生雑誌
8	Proceedings of SPIE	日本公衆衛生雑誌	老年精神医学雑誌
9	Gene	Analytical biochemistry	小児保健研究
10	Tetrahedron letters.	The journal of biological chemistry.	神奈川県立看護教育大学校看護教育科看護教育研究集録

注：太字は看護分野の雑誌（定義は表1と同じ）を示す。

年度には7タイトルがそれぞれ和雑誌となっており、この3年間で和雑誌の受付が高くなっていることが明らかである。また、表3に現れる和雑誌の多くが看護分野の雑誌であり、全国的にも看護分野の和雑誌の依頼の増加が顕在化していることが確認できた。

なお、上位100タイトルにおいても、2003年度には和雑誌が31誌を占めているが、1998年度にはわずか1誌（『日本公衆衛生雑誌』）しか入っていない。このことから、1998年度から2003年度の6年間で、ILL文献複写に現れるわが国の文献需要において、和雑誌の比率が急激に高くなっていることが確認できた。

5. 考察

5-1. 看護研究をとりまく環境

亥鼻分館だけでなく全国的にも看護分野の和雑誌に対する複写依頼件数が増加していることから、わが国の看護分野の文献需要に影響を及ぼすような変化が生じたことが推測され、これがビッグ・ディール後のILLに影響を与えていると考えられた。

図6は看護系教育機関数の推移を示すものである⁵⁾。1997年度から2004年度で短大が21校減少(75%)した一方、大学は68校増加(230%)、大学院は59校増加(521%)している。これは1990年頃からの、看護教育の充実と看護教員の養成に重点を置いた大学学部レベルでの看護師養成の拡充政策によるものであるが、「専門看護師」といった看護系大学院修士課程の修了を要件とする資格ができたことも要因と考えられる。一般に大学院生の増加は研究活動の活性化を示す指標であると考えられるので、分

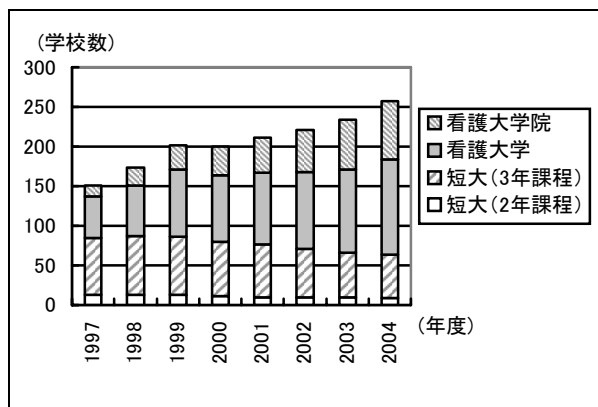


図6 看護系大学・大学院数の推移

野全体の研究活動が活発になっていることが推測される。

次にデータベースに収録された論文数について見てみる。図7は、国立国会図書館の『雑誌記事索引』に収録された、「看護雑誌」掲載論文(誌名に“看護”，“ナース”，“Nurs”の含まれる論文を検索し，“那須”などのノイズを除いた)の数を示す。収録数は年々増加している。

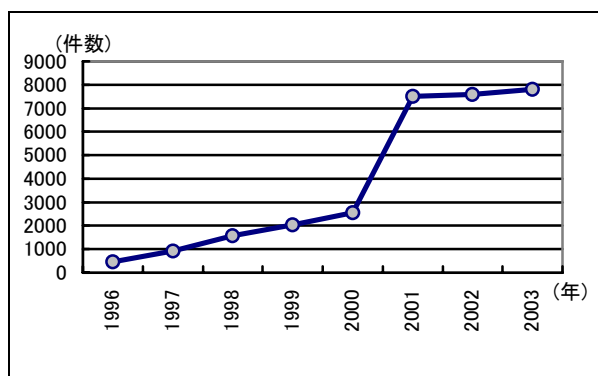


図7 雑誌記事索引における「看護雑誌」掲載論文数の推移

また山崎らによると、わが国の代表的医学文献データベース『医学中央雑誌』における、1984年から2003年で看護関係の収録論文記事数は、4倍に増加している⁹⁾。二次データベースに収録される書誌数の変動は、収録対象誌の変動等の影響を受けるため単純に分野全体の論文数の増減と等しいと結論づけることには慎重であるべきだが、これらの現象は看護文献(それも日本語で書かれたもの)の純増を強く示唆している。またこれらの数値は、少なくとも看護分野における論文情報入手可能性が高くなっていることを示している。

ここで得られたデータからは、大学・大学院数の増加により看護研究人口が増えると同時に研究活動が活発になって文献需要が高まったこと、研究活動

の活性化の成果として日本語で書かれた文献の数が増加したこと、その結果これらに対する新たな文献需要が生じるといった正のスパイラルが生じていることが推測できる。このような状況に対応する形でILL文献複写依頼件数が増加していると理解できよう。また「21世紀COE」の影響も少なからずあると考えられる。亥鼻分館の場合には、そのサービス対象である千葉大学大学院看護学研究科が2003年度から21世紀COEプログラムの拠点として選定されており、それによる研究の活性化が文献需要を増大させ、ILL文献複写依頼件数の増加につながったと考えられる。しかしながら、本研究はILLという形で顕在化する需要のみを扱っているという限界があり、看護分野全体の文献需要がどれくらい増加しているのかということについて断定できるようなデータを持っている訳ではない。この推測の検証は今後の課題である。

5-2. 看護文献の整備状況

ILL依頼件数が多くなっていることから、看護分野においては、文献需要を満たすための資料の整備が各大学レベルでは遅れていることが推測できる。例えば、亥鼻分館における依頼上位タイトルリスト(表1)に2002年度から2004年度にかけて毎年現れている唯一の雑誌である『死の臨床』は、Webcatで確認したところ、55館で所蔵されている(2005年11月現在)。しかし創刊号からそろっている図書館は、Webcatで確認できる範囲では3館しかない。看護文献の引用における半減期についてはどれくらいかははっきりしないが、山崎らが人間の心身を対象とする看護分野においては心理学や社会学など人文・社会学系の文献も必要である⁷⁾と述べていることからわかるように、研究スタイルがこれらの分野に近く、それゆえ一般的な自然科学分野よりも古い文献を必要とすることが推測されることや、看護系大学の多くが一部に短大からの改組を含むもの新設学部・大学であり、かつ短期間に集中して設置されたことを考えると、バックナンバーが重要な情報源となることが推測されるにもかかわらずその整備が必ずしも十分にはできないという事情も推測される。それゆえ現在ILLの依頼状況に見られるような看護分野文献への集中は当然継続する可能性が高い。このような状況に対して、図書館間の相互協力に基づく資源共有を政策的に考えるならば、例えば、全国的に利用の多い雑誌について、大学間の協力に基づく電子化の推進といった方策も検討に値するのではないかと思われる。

6. まとめにかえて

ILL 文献複写サービスにおいて、ビッグ・ディールの影響はまちがいなく存在する。図書館単位で見た場合には一見依頼件数の変化がなかった亥鼻分館においても、医学系においては複写依頼件数が大幅に減少しており、これについてはビッグ・ディールの影響以外の要因を考慮することができない。しかし、看護分野では依頼件数がむしろ増加しており、その要因としては、ビッグ・ディールとは関係のない事情、すなわち看護分野における研究の活発化とそれに伴う和雑誌掲載論文への需要の高まりが生じていることが推測された。しかし、現時点では看護研究における文献利用の特性についてはまだ十分に明らかにされている訳ではなく、これらの要因だけが本研究で観察されたような現象を引き起こしているとは断定できない。例えば、昨今の医学、看護研究におけるエビデンス重視の傾向を踏まえて、看護分野における研究あるいは論文執筆のスタイルの変化が生じ、多くの論文を参照することが重視されるようになったことも想像できる。また、本稿で示されたような ILL 複写依頼件数の増加が看護文献需要の増加の実態を示すものなのか、また和雑誌への集中的な依頼の増加が看護分野における情報需要の特性なのか、それともいずれも ILL という環境の中だけで観察されるものであるのかは現時点では断定できない。これらの諸点については、今後わが国の看護分野を対象とした学術メディアやその利用状況などの分析を目的とした包括的な研究によって明らかにされていくべき課題である。

しかし、各大学における看護分野の研究活動を支援するためのコレクション構築という点において、新設看護大学図書館あるいは新たに看護分野のコレクション構築を始めた大学図書館だけではなく、長い伝統を持つ大学図書館にも不十分な点があることが本研究によって示された。このことは看護分野における文献供給体制の改善を個別館レベルのみならず大学図書館全体の問題として検討する必要があることを示唆している。また、本研究の結果は、ビッグ・ディールの影響と一次情報の蓄積・提供についてマクロに考察する際にも、何らかのセグメント化の必要性を示唆している。例えば和雑誌の需要というのはどの分野にも生じているのかどうか、今後さらに実証的にデータを分析し検討する必要があるだろう。また 5-2 で指摘したような電子化のための具体的な検討を行う際には、タイトルレベルの分析だけではなく、需要が多い年などを含むより詳細な分析も必要になるであろう。

謝辞:本研究で使用した ILL ログデータの一部については、本文及び注記でも言及したように国立情報学研究所からの提供を受けたものである。記して感謝申し上げます。

注:本稿は科学研究費補助金基盤研究(b)「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」(平成 16 年度~18 年度, 研究代表者:土屋俊)による研究成果の一部である。なお、本稿の内容は第 22 回医学情報サービス研究大会(平成 17 年 7 月 9 日~10 日, 於愛知医科大学)において口頭報告している。

注記・引用文献

- 1) 藏野由美子, 中元誠. “第 10 章 電子ジャーナル”. 変わりゆく大学図書館. 逸村裕, 竹内比呂也編. 東京, 勁草書房, 2005, p.127-139, (ISBN 4-326-00029-5)
- 2) 加藤信哉. “電子ジャーナルのコンソーシアム利用が大学図書館の文献デリバリーへ及ぼす影響”. カレントアウェアネス. No.281, CA1530, 2004. (オンライン), 入手先 <<http://www.ndl.go.jp/jp/library/current/no281/doc0002.htm>>, (参照 2005-12-5)
- 3) 国立情報学研究所. “ILL レコード件数: ILL 流動統計 (館種別)” (オンライン), 入手先 <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/nill_stat_flowdata>, (参照 2005-12-5)
- 4) 国立情報学研究所から提供を受けた NACSIS-ILL ログデータをもとに算出した。
- 5) 日本看護協会出版会. “看護大学・短期大学一覽 (課程別)”. 看護関係統計資料集. 東京, 日本看護協会出版会, 平成 9 年~平成 16 年.
- 6) 山崎茂明, 六本木淑恵. 看護研究のための文献検索ガイド. 第 4 版. 東京, 日本看護協会出版会, 2005, p.9-17. (ISBN 4-8180-1154-1)
- 7) 前掲 6). p.106.

<2005.12.8 受理 よねだ なほ 東京大学附属図書館情報サービス課柏図書館資料サービス係 (前千葉大学附属図書館情報サービス課亥鼻サービス係), たけうち やえこ 千葉大学附属図書館情報サービス課亥鼻サービス係, かとう こういち 千葉大学附属図書館情報管理課亥鼻情報係長, たけうち ひろや 千葉大学文学部助教授/附属図書館ライブラリー・イノベーション・センター リサーチフェロー, つちや しゅん, 千葉大学文学部教授/附属図書館長>

YONEDA, Naho, TAKEUCHI, Yaeko, KATOH, Koichi, TAKEUCHI, Hiroya, TUTIYA, Syun
ILL photocopy services under Big Deal: a case study on Library of Health Sciences (Inohana
Library), Chiba University